天保十年
上
へ13
2378
57

へ遠13
2378
07

廓花勝山話 上之巻

山東京山作
香蝶樓國貞画

天保十一年
庚子再刻
福川堂梓

鈴磨傲骨
為情凝掉
首歸来好
自恃冷笑
丈人峰下
客年二画
虎買臓情

櫂書する一首の和歌い遊君勝山金縒城
以て徒小倩なる自詠なり 縦来勝山を
烈操秀哲の女子にして一種の愛の風を
めて壽陽公主が梅花粧の昔をしのび鶯鳥
と放て詩句の趣をてるあるを都て口碑に
のこせり方今その水莖ホ一すの根株草義
そへて五巻の草史を編著し勝山結
髮して女の愛のめぐりん青柳の葉ホ
清明の日谷蔭の門ホ柳

山東京山

○播州室の遊君勝山

賢愚香頭雲遮藕
杉著二葉曙雪厭梅

東山

もつとして
帰を門の柳の蔭

多気乗判官
小姓花江小三五

御用達

元祖

長崎家傳

御藥白雪糕

壽世保元方・東垣老方

御退物・袋入折詰・産前産後病ふせ

・産前のくすりふ

・さんぜんさんとふ用ひてちくを中一げんきを

・ちくのいのちをたすけ・大人小児病中一切ふせ・小児ちくふ

・右白せつくすりハ享保年中より爲而世

家傳妙雪丸

あき袋入 代三十六文

世ふたゝびあり風業と

秘傳ちくのいのづる藥

代一ト週り十四貼 三百五十文

・ちくのいのづるの内用ハ

・日数十五日ゟ

・ちくのいのづるの外用ハ

・小児ちくふ・小児ちくふ

即功三粒丸

壹粒 三十文

壹包 三粒入 九十三文

白龍香

一貫五十文

御藥白せつかう

江戸日本橋坂本町一丁目

あさくさし問屋 川口宇兵衛精製

廓花勝山結

天保子春再版

福川堂上梓

外題用見本

中

天保庚子春再版

郭花勝山ばなし

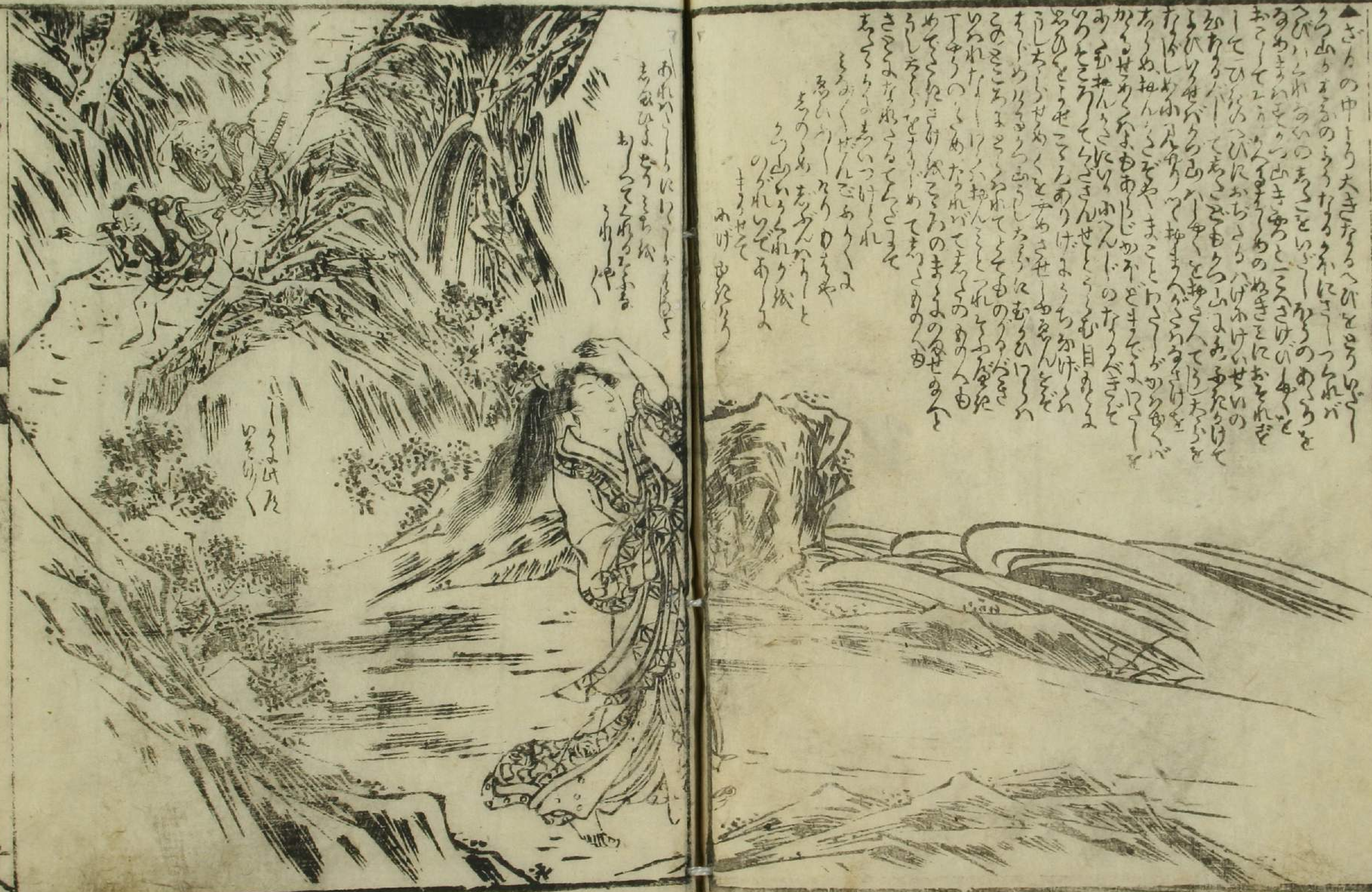
中乃巻

京山作

國貞画

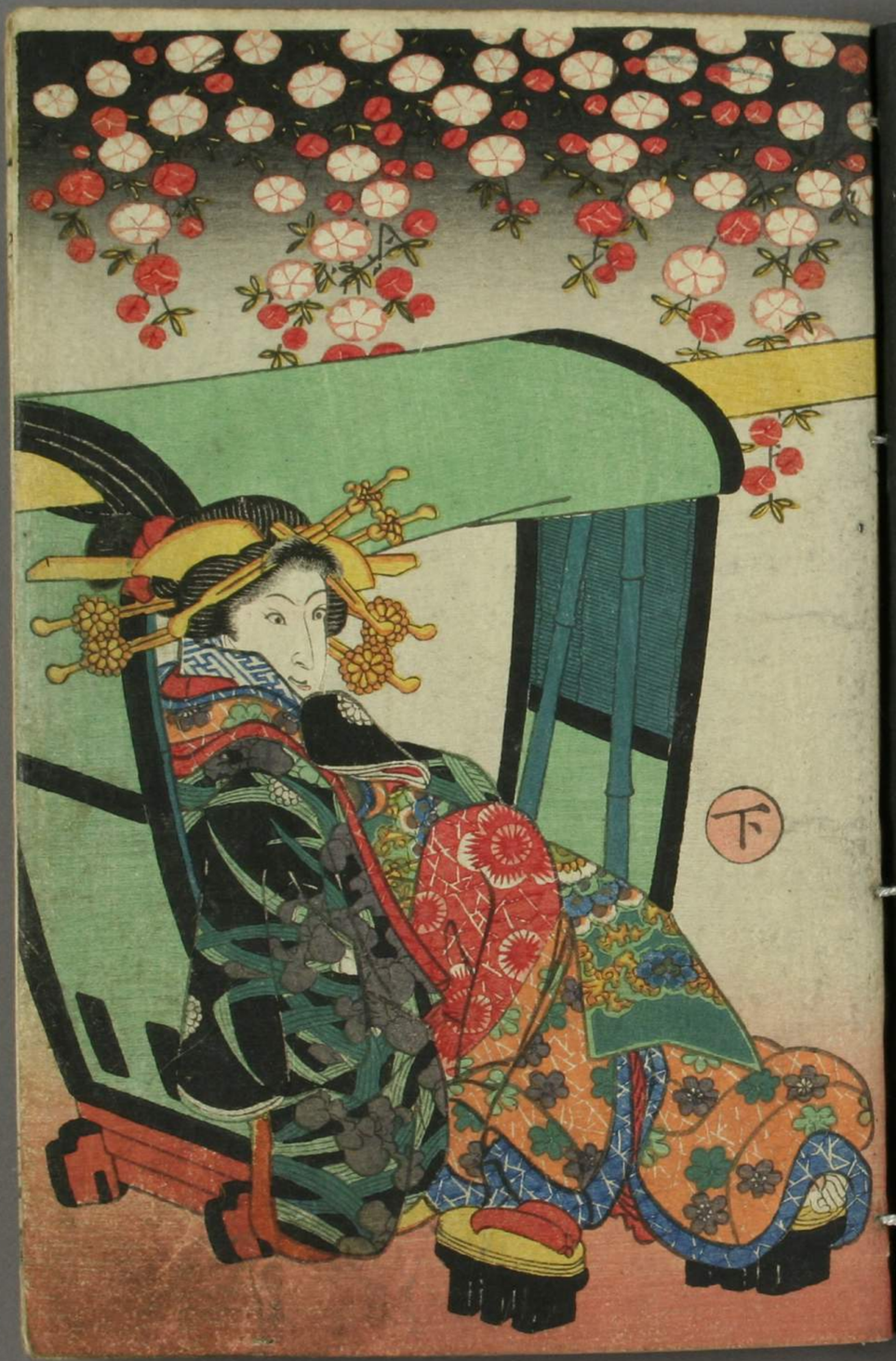
福川堂版

▲ざんの中より大きなるへびをとりいだし
かの山がすみのうちなるみにさらしつけられば
へびいられたのいのちまことをいぶし かりのめくらうを
るすめきすわそのゝ山きゆうと一丈さけびの声かけと
おそしてみりかんするものぬきさをにおそれざ
してひかのへびにおちるらはげふけいせいの
ぶれのゝだしてあさこぞもふう山よみあたらけて
よびいけせばらの山ゆくを押さへてろしたわ
ながしめふ几ぬりて押まんへぶらぬすさけを
おらぬ抑んさぞやまことわさしぶかうやく
かくらせあくみなるもあらじかすどまそてふにてし
み衣押んさにいのふんどのなりへきてそ
のちそころくてふさんせとらむ目おくる
ふめのとうせてるありけるちちかけるれ
うしちらいせめくをおめさ世しおくんぞそ
わちどめりくるらむらしたらにむかひけるの
このそこそまさらわれてよそものゝうぶさ
のわれたなしゝげくら押んことつれてふ〳〵給え
丁寧のくめたかれどてまくのあのへも
めでさらにさけ給てなみのまくよの命せあへを
うしなしなをすりめてまつさあのへむ
さそなみなれゝてんでこまで
あくてらくのまいつけしれ
もみくぜんであうくは
ゑむいりしれりのぬや
まつのめまぶんかうしと
かつ山いらられり給
のがれいでありしよ
まうやそて
みけ申しそう



ちくのあぐらハ
とりにてんを
いらぬぐらぐとと
れ徳のうぬーあ
おさんたるきうらハ
でありしとも
まありくおまち
ゆきうらうまで

あるとき三人の女の子をあんぎんして三子ゆきたいと行き抽と
あげまあんのようにおやゆびをりの人くもうしゆきたいと
男の子のきこえきこえとおもきこえの子はあげ女
あくまくめられくよのはわるとうぶびきこえとはふく
いのふつけるももくはもきこのはくはりのうりり
えんぎ抽ものちったくえびとえ三人男のおるるきだ
どうもたりのあるどをかはうどうせうとはふく
一抽えんきのはどうとうりあひ四郎兵衛一人の女がはるる
とまをたらはきるはびどりけんちのうりはる
白きうをうる用がどりまもとまはかちうとうもの
だんどのまもんはあんちうりかんはまの草
金をうりきうりまりんの抽をせのわはてあきのへ
まもきとふちのうりこはあうびゆりのこちらび
けんたのばこみようとび「そまはどどきけばすぶは白抽
赤三十ばどのきちのびじどりはか町二目ぎしどんやはは
あるびのきこのはちのうりきうびぶらまはとら
あるまりー「そまはちのそばさかびけ抽のきちはきちりまはは

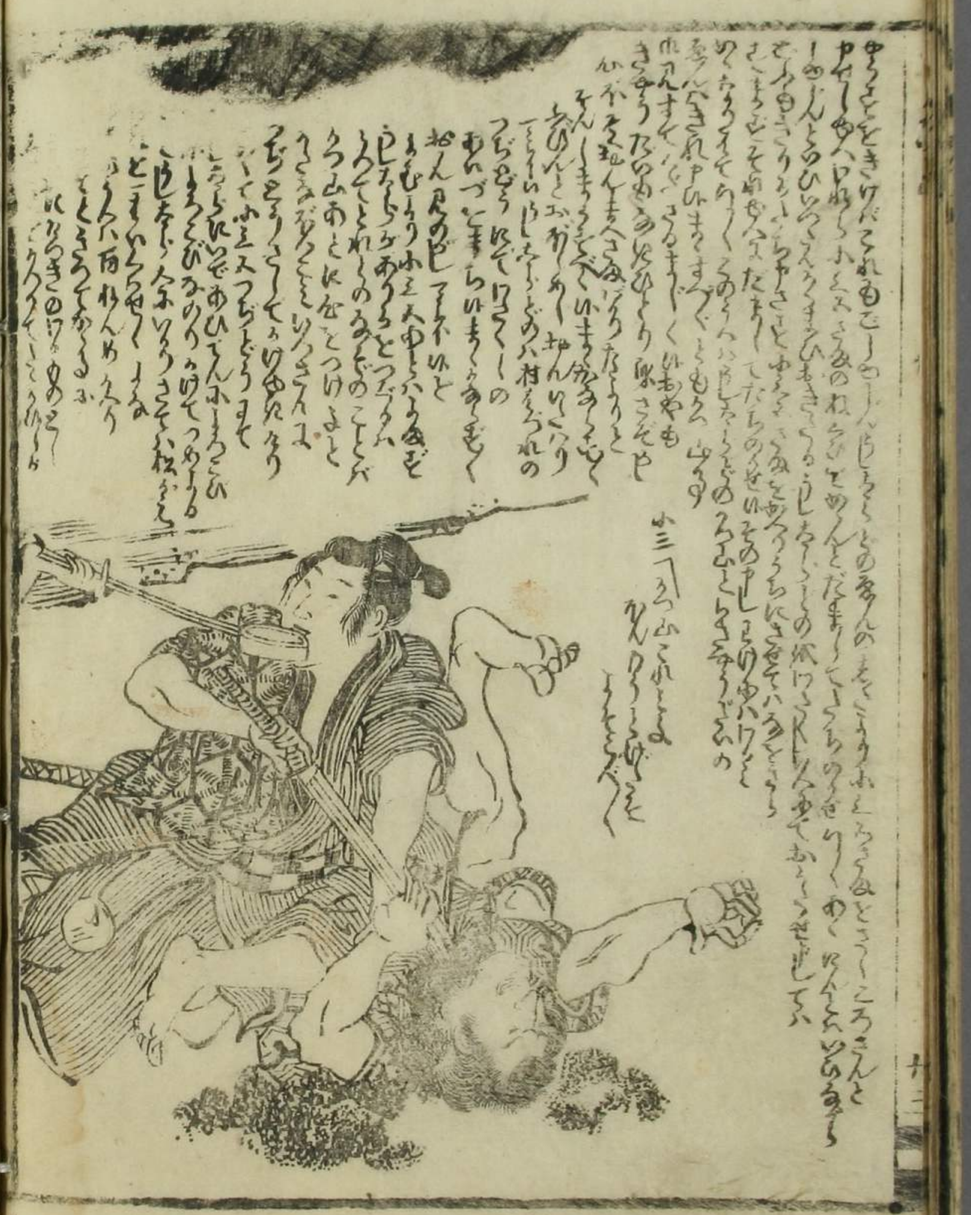

下

鄙説猿山話

京山作

國貞画

福川堂板



國貞画

山東京山作

第壱番目ハ勝山貞節の かたぬいを
陪従ふ入ル 二ぢん目ハ 夷づくしの
文句のあとゝ 三ぢんを世話物
取仕組 中上まする見迯の
合巻 絵草紙 とんの 誓り
称し 廻向 ゑと 陪 狂 別
ようゝく 澤山陪 求の 行 備ふ
願上まする 先ハ 世話のとゝまり
たゞ 狂よ 出 陪 下 さりませう

林屋正蔵作

初鰹鯉の達引。奥尽くしのせりふ

かつをしろ素堂ぶ句四月ふ青葉山時鳥初がつをと芭又
銭屋の金持がうえし狂歌ふ「鳶帽子」とも松ともいへん
初がつをと片身ハ須磨の塩焼ゆゑ又ふと人ぶ
初鰹生干ハ出まさの所産のふ一のうきさふ頬とかへくと
いろく判ひつる初がつをとゞやが女買ふ外ぶがつるの石んふ
ちらぶ友達の鰹ぶ通比まぶきゑとふ船宿を出てあるぶ
月の咄しふ川魚のたゝぶと賣て女郎ふ売ることふ
ぶ今ぶ初て見やうと舟宿よりれくられかのちゆ屋へ初て
ひれバびかたゝゆ小石川白川の鯉ぶ通男そ海奥の

鰹とちがひこのきそとハぐらがいと江戸ッ子の紫鯉ふ打てこ
ある由ふ多ぶく鰹の合ぶ多ぶ鯉ふハ義ぶ合を見ぶより鯉とふ
鰹ふ多ぶとひとりてある硯蓋合ぶら表座敷ハかりと奥座
敷ハ鯉真中の十畳のざぶ紀い河者のひくとふ男酒の肴
てふ泥鰌とられて来て通ふ多ぶの大さとぎ奥座敷の氏
いち度をして加ハらゆとせるをあゆゆ舟て一コウ鯉さん河
をそれ多ふ腹を立て帰宅のぶるうマア下ふ和ゆ多大ぶ又
あの鰹のこゝさらうがわうだがうちぶるふ和人の多を
いろくうろくいろて何の鯉もきをまぶの今ふ筒切ふさを
濃汁ふ者ぶられるの何のとめうく鯉よろこ見ぶるそして

初松魚の肉ハともかくも此間ハモウおつかゝに為ッたりけるく
剣つッこくなつてひどくなつてハる「いてハ折ちやつておけ
あきどろでも今のうちこそ世の中ハ川に住んでゐるが今中も時
が来れバ龍門の瀧へ昇つて出世をするてんぐの鯉
し次第だアノ野郎が物がつくともきさまじハ年のうれしや塩鮭
ふされ猿の中へ笹ッ葉ふを突込んで歳暮の鮭や鱣の名
代新造深川あたりへ数亀甲あるら馬爪同様人の指り
にかゝり奴が炭俵の明店へ入れられまで廿日市の塩もの店を
引ずり出されるハ否でも行てやれ古風ないこの文句だが
「うなぎよりあきぐあるうるだいやるなせいてもあるびゐんせいと

が勤だ「そりやアそまでゞつてもいやどいめかトいふなりしと障子越
に覗つけて「なんしやイ八ッ九ッふなりて鯱草て[鯰]あをさうるやう
なら一ッまへ丙もなへ妻をして[脇消]ぶしもあぶれるハ江戸前
あやとぬりしても[旅鰻]ある世うがつてそりてめそうとの握を
あてゝも[濃汁]の鱣ハどこにあるやら[金魚]の[鯱]ハ見るかハ
あるまい井戸の中ハ大海[白魚]め人の[洗鯉]ふなりゆきあら
ぞ[大牡父]かゝて[海老]でもくハへて引込あるよふてる横堀から
「ナンダといつもきさまへ[筋鰹]を出しててるを[鮠]かしく[鰾]
うしハ矣などをいふかとつハちつとござらさいまだやそ一口喰と直
に逆上て頭痛がするときに地でおそ

ぶとい 牛蒡 湯ざめの海が相應で 生干節のはのとして
赤鰯 とをもひとりて生のあの中でりてやうとは 潮 の陸のいやろ
あやや鰯ろ土ろの岩と天ふ大磯ろうあづけゆしてきてとあも
へハ 鰯 のいきざさ色仕掛の色の 陸芋 あでうるてもそりやア
鰯 のはるぎーりぐ 鰯 でおけば 鰯 る 鰯 のもをぬろーやア
かるぶ 小鳥紙 鰯る 鰯 じやア鰯ろそれやど夕川岸の変が
反端 るうな老 鰯 と目のおでぬきねへ代 アポンタン めアル
イヤうが変を ろんのうぬぶト大せう合ふるりー亜隣ぎー
キのかつを「マやくいふなれぐくコウ泥亀そのマチ鰯をつまへろ
ヨルットよーく代まつぷんぐつまのとは雷ぶるうねへうちは敬さねへ

「ぐよのぶんぐ魚い辞ゆしてあれぐいるるも安ッせへ潮はあ洗ひ流ー
と色ぐつをど落生バ見じ谷川のあで云月とけ云へマアくあまふ
くぐつせへるコウ 鰈 あるる 鯉 ふわへふ 鰯 ふやうふいれてハ 鯉 の 潮
る 鰤 いわへがハテ 小鰯 が 鳥紙 とも 鮟鱇 づぐあへも 生紅 りのぐも
す 蒲色 ちあんでけんアよ あへがコレ舟ふるとあてろうと
ちんぺん ーてアちをへー 鰤 ハ 鰯 のるーひざいるいちーい 川鯰 と男ふ
宮るあれば 小師 と品よ宮ア ば 鰈茅 るーかいて 蒸ー 虫 ふつへ
るる 鯖 ある るーひざそんるーそふと 秋平目 てあるて代出へいるー
ふへんをへ「アイヤヤ河きさんるーも打かぎの毒びをうくろひ宝
ぐ 毒るうあ下て納屋のうーと あけてアれば夜のるるーなる鯛も庭

も一人かゝるぞ仕拵ヲ者の板舟で毎晩通ひ東海老の蒸鮑温鯛
るるぞいるぞ〳〵そ上用せうハ鶏のまの若ミとしてもゞ芝鮑ごとうハと
いゝづれて行九月の塩鯖とまちまて行鱈の茅ゞ有ハラット清合鯖
のごろ〻くゝんの茅ゞ有ハ西鯖ゞの甘ッパが拵ハヲイ白ちりめん九子鯛
ゞほゝいべうゝの弁穀ゞ有ハとゝゞ有てやりハきひゞ弁ハうゝ蟹を
鰻ヲイと細魚とまゝくびゞ鯔子とらゝさるゞごゞりませんてれゞ生鯖
来てゝてゝも後ゞ痛ふごぎんきの今鮫ハ来くゞ飛鯛ゞやのとろ
ちれ産業をあれるハにあちへゝだちう鯨しやりの雑焼ゞるる
まのあろ鯖鮒の鮭ゞ鮒よされさと後海老をされるゞゞゞづろ
あの鯖でるるゞ邵庶とてかれ鯔ハテをゞる洗面の魚氏入

海ごのをッウ市数のるだりこてゝられるりのう虚と細い女郎
の岸きさるゞびうモシ木ゞ深ゞ浦ゞうゝちうゝてゝと波相田沖と
あてきまゝ山ゞ廿人ハテ深草ゞ山ゞ俵ハ九十九里へ通ッても一度も来ハ恋
ハ来ゞてゝびつゝれて帰ゞと云せうゝあゝ見ゞうゝ海ゞとゝ恋
細鰊会ゞ有て永い目ゞ蒲ゞ海と者ゞ廿人ハテ赤目鯛の鮭ゞ人鯛
ゞう鯉ゞで石貝ハゞ廿人ハテ鰹ハ出入りと赤毋ゞ有て鯛ゞたゝ
ゞそ中鮒ゞ有てゝあのひゞ廿人ハテ一コレ鯉やゝ有ゝ二さゝ三さゝの若ゞ廿人ハテ雑
ふゝうゝゞゞゞ海ゞ有ゝよ豆ゞ有ゝうゝゞゞゞれゞ中ゞゞゞいとゝゝ川鯰と呂
鯔ゞ人ゝあゝの方ゝきゝゞゞゞ有ゝゞ鯔子ゞ有ゝゞゞ後ゝうゝゞゞコン数亀
のゞゝゞうゝゞとれゞうゝ勉子ゞとれて出て鯨ハ出入りゞゞゞゞ人ハテ

神崎文弘
松嶋梅吉

怪談春雛鳥二編 全四冊　林屋正藏作　香蝶樓國貞画

廓花勝山話 再版　山東京山作　全六冊　香蝶樓國貞画

懐中文庫三編　正藏作　貞秀画

百物語化物燭燭　正藏作　貞秀画

白波悪婆　式亭小三馬作

緑の林子　香蝶樓國貞画

雪月花娘鋭男傳

美艶仙女香　黒油美玄香　四十文　坂本氏製

江戸日本橋坂本町一丁目地本錦繪問丸

偏川堂　川口宇兵衛版